

# 平成26年度 社会人力育成山形講座の連携取組評価

行政機関や経済団体の代表、そして連携校の担当教員ら16人で構成する連携取組評価部会は平成26年度事業として学生や教員を対象としたアンケート調査の分析などに当たり、社会人力育成のための本事業の進捗状況などをチェックした。同時に各地で開講されている講座に直接出向き、学生らの受講状況などを見ながら、具体的な評価に向けた調査に当たった。

評価作業は、①大学の強みを発揮し、または補うような共同教育が確立されているか（各科目のカリキュラム内容、受講生の確保、単位互換履修者の一定程度の確保、内陸と庄内で共同教育を行うデメリット及びその克服策、受講生の出席状況と単位取得状況、担当教員から見た提出レポート内容と試験答案の出来、担当教員及び参観者から見た受講生の発言・質問・議論の充実度、受講生アンケートあるいは意見開陳等から見た受講生の授業満足度と習得度、社会人力の向上など）、②学生の山形県内への就労意識、③大学等と、山形県をはじめとする行政・政財界との連携がスムーズに展開されているかの3項目が中心。

このうち②の就労意識関係では、学生が授業の中で地域に興味を感じ、将来の就職や進学を選択において、当該地域が大きな選択肢になるような知識や経験を得ることができたかどうかなどについて、学生アンケートを踏まえながら評価。さらに③の行政・政財界との連携については、現在の取り組み状況について、今後の展開等を含めて評価に当たった。

今回の評価は、開講科目の進捗具合や受講学生の理解度を数字で表すことが困難な項目が大半を占めているうえ、必ずしも教育問題に関する専門的知識を有しているとはいえない方々を含めた委員による主観的な評価となっている。その意味では、甘い見方、辛い評価が交錯しているところもあるが、それはとりもなおさず、良識的な社会人の目線から見た、ごく一般的な評価・判断として受け止めるべきだろう。ただ、そうした中にあっても、評価結果は各項目とも5段階評価のうち、委員の回答平均値で3（普通）から4（良い）となり、概ね良好・順調だったとの見方が多数を占めた。今後の関係者の努力次第で、さらなる成果が期待できることが浮き彫りにされたといえ、関係者の努力の下、本事業が一層、進展することが切望される。

連携取組評価部会による評価結果の概要は次の通り。

## 1. 大学の強みを発揮し、または補うような共同教育の確立について

### ① 各科目のカリキュラム内容

(5段階評価(委員回答の平均): 3.50点 内訳: 4点/4名、3点/1名、2点/1名)

#### 【総括評価】

開講科目の設定とカリキュラムの内容は本事業の成否にかかわる大きな要素となるが、連携取組評価部会では概して相応の高い評価を受けており、関係者の理解を得ているといえる。ただ、地域的な偏りが見られることから、県内全域に目配りした科目設定が望まれることや、産業界の意向も聞きながら、より成果の期待できるカリキュラムを設定することも大事、との見解も示された。

#### 【個別評価】

開講科目の設定などについては各連携校の担当教員が中心となって学校の特性や学生、地域のニ

ーズなどを総合的に勘案して科目案を作成。さらに行政など関係団体の意向や地域の当面する課題などにスポットを当てる科目を候補に挙げ、最終的に事務局が中心となって調整・決定している。大半は連携校案が軸となるが、例えば「山形プロジェクト」の仙山交流に関する授業などは、仙台—山形間のさらなる交流促進が地域における喫緊の課題となっていることから、行政側の動向なども踏まえて開講科目に加わった。こうした中で設置された科目だけに、連携取組評価部会でも「全体的にバランスが取れ、内容的に評価できる」「選択の自由度が高い」と総じて好意的に受け止められた。

ただ、山形大学提案の科目が圧倒的に多く、短大側から提案し実現できた科目はわずかだった。本事業に対する連携校の取り組み姿勢に違いがあるなど、それぞれの事情も考慮する必要もあるが、この先、科目の設定についてさらに検討していくことも考えられよう。連携取組評価部会委員からも▼地域の魅力を体験的に学習する山形フィールドワーク教育では、庄内や最上地域を対象とした授業もあればよい▼優れている科目と劣っている科目の差が大きすぎ、総じて学生の即戦力となるものが少ない▼社会人力育成を主眼とする講座なら、その受け皿となる企業からも設定科目などについて提案できるような仕掛けがあれば、もっと生きた講座になる—といった指摘も相次いだ。

このほか、本事業で啓発・刺激を受けて意識が向上してきた学生をさらなる高いレベルに誘導する施策を準備しておくことも必要、との立場から、新たな講座の開設や他講座への参加推奨とともに、インターンシップや社会見学、実習への参加など、企業側の協力を得ながら新メニューを設定。学生の期待と意欲に応えることも検討してはどうか、との考え方も示された。

## ② 受講生の確保（評価：3.66点 内訳：5点/1名、4点/2名、3点/3名）

### 【総括評価】

26年度の履修者数は目標400人に対して504人。前年度の25年度は400人の目標に対して478人だったことを考えると、本事業の意義が徐々に学生に理解され、それが履修者数の増加に反映されてきているともいえ、関係者の尽力は評価できよう。一方で、山形県内における高等教育機関の代表的存在で、本事業の中心的役割を担う山形大学の学生が他校に出向いて受講するケースは少なく、本事業に対する山形大学学生の理解度の増進策や大学当局による学生の誘導策と同時に、学生の興味と関心、そして学習意欲をかき立てられるような魅力ある科目・カリキュラムの設定が求められる。

### 【個別評価】

「科目によって受講生にバラツキがある」といった見方もあるが、概ね「受講延べ人数としては一定程度、評価できる」としている。だが、登録受講者数だけを見て喜んでいられないのも事実。「ほとんどが自大学の学生の受講となっており、受講動機や、学生が本事業を通常の授業と区別して考えているのかが分からない」ためだ。

そうした中で山形大学の前期履修者数123人のうち、他校に行って受講したのは極めてわずか。他大学での設定科目に対する興味・関心の低さなどがその要因と考えられ、今後の検討課題に。また、短大生は単位互換型が一定程度、確保されたものの、受講者数自体はまだ少ないのが気になる。在学期間が短く、授業日程がかなりタイトなことから、他校に赴いて希望科目を受講する時間的余裕がない、あるいは専門外の科目が多く、飛びつきにくいといった悩ましが背後にあることがうかがえる。

どんな組織であれ、異なった価値観や経験が混ざれば、新たな刺激と活力が湧き出てくるのは世の常。本事業でも、学習環境や文化の異なる他の連携校から学生が受講することで教室がにぎやかになり、活気にあふれるようになったケースもあったようで、担当教員からも「後期に別の大学の学生が参加し、活気づいた」との報告が寄せられた。本事業の相互乗り入れ的な仕掛けが予想外の副次的効果をもたらした例として記憶に留めておきたいところだ。

③ 単位互換履修者の一定程度の確保（評価：3.80点 内訳：4点/4名、3点/1名）

【総括評価】

単位互換履修者数は26年度前期が42人、後期が22人。数の上では一定程度、確保されているが、前年度はそれぞれ49人、44人を数えており、減少した格好。単位互換履修は本事業の最大の眼目。単位互換履修者がさらに増えることを期待したい。

【個別評価】

前期の単位互換履修者は42人だが、連携校の中で意欲的な取り組みが見られたのが東北公益文科大学の12人、東北芸術工科大学の11人、東北文教大学の7人など。特に東北公益文科大学は遠隔地の酒田市に立地しているにもかかわらず、単位互換履修のため、わざわざ山形市内まで出向いてきており、その熱意には敬服したいところ。それに対して山形大学生は全受講者数こそ123人と圧倒的に多かったものの、他大学受講の単位互換型は東北芸術工科大学へ2人、東北文教大学へ1人のわずか3人だけ。ほとんどが自分の大学で開講された科目を学ぶ形になった。「(人数だけから考えると単位互換履修者は)十分に確保されていると感じる」という委員もいるが、山大の3人という実績については「どう評価すべきか、分からない」と判断に迷う声も。しかし、本事業の趣旨などから考え、「より増やしたい」と学生の発奮に期待を寄せる担当教員もいた。

こうした中で東北文教大学短期大学部は受講者10人のうち単位互換型が5人、山形県立米沢女子短期大学は受講者4人とも全員が単位互換型で、意欲的な取り組みが際立った。4年生大学が中心となる本事業に短大生側がどう対応するか、当初から注目されていた。それというの、2年間という短い期間の中で各種資格試験のための授業日程がかなり厳しく、他大学などに出向いて講義の輪の中にスムーズに入っていけるか、不安視する見方があったためだ。だが、受講者総数はまだ少ないものの、単位互換型に関するデータは、こうした不安感を和らげており、本事業が一定程度、短大生の学習意欲をかきたてるものがあることを裏付ける格好となった。

④ 内陸と庄内で共同教育を行うデメリット及びその克服策

（評価：3.60点 内訳：5点/1名、4点/1名、3点/3名）

【総括評価】

本事業の連携校は大学、短大、高等専門学校を合わせて9校に上るが、その設置場所は日本海に面した酒田市から、150キロも南にある福島県境の米沢市まで、広範囲にまたがっており、希望科目を受講するにはかなりの距離の移動を求められる場合もある。しかし、公共輸送機関の整備の遅れなどもあって、学生が選択できる移動手段は限定され、結果として折角の受講意欲もそがれかねない。こうした点に配慮し、26年後期からコンソーシアム事業として遠隔地受講者への交通費補助制度を導入。初年度は酒田市から山形市に受講に来た学生25人にバスの往復交通費を補助した。学生の負担軽減に向けて大きな一歩を記したわけで、学生の受講意欲が大いに高まることが期待される。負担軽減と意欲の増進に向けて、宿泊設備の提供など、新たな課題の解決に向けて、今後も前向きに検討することが望まれる。

【個別評価】

山形と酒田といった文化や歴史、住民気質の異なる地域で学ぶことの意味は小さくない。それは、相手地域への理解を促進させるだけでなく、他地域を知ることで自分の住む地域に対する愛情や誇りを再認識・再発見させ、新たな地域づくりに向けたエネルギー源になることも考えられるからだ。本県のように連携校が北と南に分かれておれば、共同教育の展開も容易ではなく、場合によっては移動距離が長くなって学生が受講するのが困難になる。連携取組評価部会委員からは内陸と庄内に分かれて行われる共同教育について、「デメリットはなく、克服策などについて検討する必要がない」とする見方もあったが、「酒田にある東北公益文科大学の学生が内陸に来て受講することは評価できるものの、その逆のパターンは少なく、デメリットを克服したとはいえない」と指摘。そう

したデメリットの「最大のものは距離だ」として、「交通アクセスの克服が課題」と指摘する声が強く出された。

ただ、学生の学習意欲を満たす、相互乗り入れ的講座は「他」を知る上でも貴重な経験になる、として今後、さらに発展させることが肝要、との認識は多くの委員に共通している。幸い、バス代など移動費支援策は実現したものの、宿泊施設の確保策なども解決しなければ、勉学意欲をそぐ恐れがある、として早急な対応を求める声も強く出た。具体的には「学寮のある学校では、他学校の学生であっても短期間の受講生活ができるような環境を整備・提供する」などの建設的な方策も。そのほか、デメリットの克服方法の一つとして「インターネットを使ったテレビ会議のような双方向性の講座」を準備する、といった具体的な案も提示された。テレビ会議方式は演習型の授業の多い本事業では若干、難しい面があるが、ともあれ、内陸、庄内のいずれに住んでいるかにかかわらず、学生が意欲的に学べる環境を提供できるよう知恵を絞っていきたい。

#### ⑤ 受講生の出席状況と単位取得状況（評価：4.16点 内訳：5点/1名、4点/5名）

##### 【総括評価】

多くの講座で「受講予定者全員が全部の講座に出席」「過去の単位取得者も参加した」といった報告が担当教員から数多く、寄せられた。履修放棄、出席日数不足による単位取得不能とケースも散見されたが、これは想定範囲内で、教員と学生の間で「学ぶ意味」についての意識や本事業の意義についての理解が共有され、同時に教員の意欲的な取り組みや熱意を受けて、学生側が必死についていこうという真剣な取り組み姿勢がうかがえた。

##### 【個別評価】

担当教員から寄せられた受講生の出席状況報告では、8－9割が「ほとんどの学生が毎回出席した」「7名全員が全5回とも出席」「企業での実習に全員が参加」「4年生が就職活動との重複が懸念されたものの、履修者全員が全課程に出席」「全員が海外現地学習に臨んだ」といった、学生の積極的な受講意欲を示すデータばかり。「開講期間が短いものが多いことが出席状況につながった」と冷静に評価する向きもあるが、「単位取得が楽勝（と思って受講する学生が多い）と懸念していたが、真面目な履修について正当に評価されていることがうかがわれる」と学生の意欲と担当教員の適切な評価を手放しでたたえる声もあった。欠席者の欠席理由は体調不良問題以外、定かでない点があるものの、最初の数回こそ受講したものの、途中から出てこなくなった学生がいた、との事例報告も。オリエンテーリング段階での学生の意欲の見極めで早めに調整することができれば・・・と考えると、ちょっと残念だが、こうした事例は1人だけだったし、やむを得ないところだろう。

#### ⑥ 担当教員から見た提出レポート内容と試験答案の出来

（評価：3.80点 内訳：4点/4名、3点/3名）

##### 【総括評価】

学生の出席状況を反映して、提出レポートのレベルもまずまず。感想文の域を出ないものもあったが、概して高い水準にあると認められるものが多かったという。学生の考え方に独自性、新規性が見られた、ユニークなビジネスアイデアが示されたといった、若者ならではの新鮮な頭脳の響きが見られた報告もあり、本講座が相応の実績を挙げつつあることの証左ともいえる。

##### 【個別評価】

「試験期間に3週連続してレポートを課した」「学びや反省、期待などをまとめるレポートを毎回、課した」「小レポート3回と最終レポート」「起業演習でドリームマップと事業計画書の提出を求めた」など、パターンはさまざまだが、「担当教員の評価は総じて、期待した水準には達している」というのは連携取組評価部会委員の平均的な見方。「教育の効果がでており、教育の質保証の

観点から及第」「担当教員の評価を見る限り、概ね良い」「レアケースもあったが、全体として学生が真剣に取り組んでいることが分かった」という声が多数を占めた。

教員の個別の評価では▼レポートの量は少ないが、よくまとめられていた（「山形の魅力」）▼十分な内容のレポートが提出された（「感じる山形」）▼考え方に独自性・新規性が見られた（「リーダーシップ」）▼社長の視点を知り、自分に置き換える試みが読み取れ、ビジネスアイデアもユニーク。しかし、感想文と同等のレポートが多くみられたことは残念（「起業演習、起業論」）▼学生が発表した「私の提言」には傾聴に値するものもあった（「地域と経済」）▼必要条件を満たした書き方をしている。どの学生も積極的に発言し議論が途切れることはない。回を重ねるごとにスピーチの仕方を工夫して楽しんでいる様子（「社会起業家論」）などが目立った。ただ、その中で、「レポートにネットからの剽窃が数件見られた」との報告も。今さら言うまでもないことだが、学生には厳しく指導することが欠かせない。

#### ⑦ 担当教員及び参観者から見た受講生の発言・質問・議論の充実度

（評価：3.57点 内訳：4点/5名、3点/1名、2点/1名）

##### 【総括評価】

学生の発言、質問は必ずしも積極的ではなかった、というのが担当教員の最初の印象だったが、口が重く、口数が少ないといわれる東北出身者が受講生の多くを占めていることを考えれば、想定はできたところ。そうした中で、時間の経過とともに発言が活発になり、積極性が見られるようになったという報告が出たことは、極めて喜ばしいことで、コミュニケーション力を有する社会人力の育成を目指す本事業の成果の一つともいえる。社会人になれば、多様な機会にプレゼンテーションをすることが求められるが、その根底にあるのは、大雑把に言えば、頭の中を整理し、目的を定めて企画・作成したあと、手順や日程を整理し、関係者に分かりやすく説明することだ。本事業もその根底にあるコミュニケーション力を磨くことにあり、こうした趣旨に沿った講座を今後、さらに整備・充実させるとともに、学生にも真剣な取り組みを働きかけ、積極的に発言・交流できるように指導することが大事だ。

##### 【個別評価】

連携取組評価部会では今回の評価作業に当たって主な講座を視察し、講義の状況を見て回ったが、「グループ討議の場面で受講生が積極的に意見を出し合い、課題をまとめようとする前向きな姿勢が見られた」「自分、あるいは自分達で議論して進めざるを得ない状況の中で、受講生もよく対応していた」「受動型の講義ではなく、議論や実践型の講義で、成長がうかがえる」「職業経験が乏しいながらも、真摯な取り組みが感じられた」「受講生が懸命に問題解決に取り組む姿、あるいは話し合う姿が見られた」といった評価が寄せられた。

とはいえ、実は最初の段階では受講生の反応はかなり鈍いと言わざるを得なかった様子。「全体的に発言・質問は消極的であった」「講義形式の授業では積極性は見られなかった」「（起業演習では）自己肯定の低下と受動的な態度になりがち」だった、と担当教員は述懐する。

しかし、連携取組評価部会委員の上記の評価に見られるように、授業を通して学生は確実に成長したようで、担当教員は「学生間で活発な話し合いが見られ、コミュニケーション力を高める機会となった」「回を重ねるごとに、自ら積極的に動き、作業を見つける姿勢が強くなっていった」「最終的にはクラスとして積極的な議論ができた」と確かな成長ぶりを報告。さらに「昨年度と比較すると、発言が途切れることなく、議論に深みがあり、何より議論を楽しんでいる様子が印象的」といった、うれしい感想も寄せられた。

こうした成長は本事業の大きな成果であることは疑いのないところだが、これからの進め方には、さらに多くの意見も。「教員全体の中で、このプログラムはコミュニケーション力育成が主眼であることが共有されていないのではないか。質問があれば、というような受け身ではなく、積極的に

発言させる授業づくりをすべき」「議論やレポート内容の深さは情報と経験の量に加え、問題意識と深さによる。それらを醸成するためには、関連した講座の複数受講を可能にすること、及びステップアップの講座が必要」といった提言も示され、今後に課題を残した。

⑧ 受講生アンケートあるいは意見開陳等から見た受講生の授業満足度と習得度  
(評価：3.60点 内訳：4点/4名、2点/1名)

【総括評価】

山形大学の場合、一部のアンケート調査から、大学における通常の授業に比べ、本事業における開講科目の教育の方がより充実しているとの印象を持たせるデータが示された。しかし、授業に関するアンケートの設問で、学生の回答の背景が十分に読み取れないことなどもあって、連携取組評価部会委員の中にも、その評価に当たっては慎重な判断を要する、との見方も出ている。が、学生から好反応が出ているのは間違いなく、これからも学生の意識に十分、留意しつつ、さらに充実した授業を展開したい。

【個別評価】

授業終了時に行った受講生対象のアンケート調査では、「この授業を総合的に判断すると、よい授業だと思いますか」との設問に対し、5段階評価で4.66という高い評価点がつけられた。山形大学の通常の教養科目に対する授業評価は4.47とされており、0.19ポイント高い結果に。細部を見ると、「シラバスに授業の目標や授業計画が具体的に示されていたか」といった項目では、教養科目に対する評価より低かったが、「意欲的に受講したか」「教員に熱意は感じられたか」などの問いでは、教養科目の点数評価をクリアしており、受講生側に一定の満足感、充足感を与えたことがうかがえた。

また、「山形県の地域の魅力に出会うことができましたか」との問い掛けでは、4.3と比較的、高い評価に。教養科目評価では問われていない設問のため、単純に比較することはできないが、これに限らず、地域に誇りと愛情を植え付ける教育指針の下、従前では考えられない、かゆいところに手の届く教育、そして従前の枠組みでは展開が難しい、新しい発想での授業が施されていることが確認された形だ。

もちろん、こうしたデータだけで受講生の満足度を判断することは性急過ぎるが、「通常の授業よりも意識の高い学生が受講していることを前提に考えると、学生の意欲に応える授業が実施されている」といった見方が連携取組評価部会委員側から寄せられたのは喜ばしいところ。過疎地を舞台にした山形プロジェクトの担当教員も「過疎地での体験は学生に強烈な印象を与え、住民たちのパワーに大いに感動したことが読み取れる」と学生の反応を代弁するようなエピソードも紹介された。

他方で「授業の評価においては、アンケートの使い方、読み方は注意を要する」「アンケート結果を見る限り、教官のとらえ方に比較して学生の満足度は低く、習得度も実技的な科目は別として、低いと解釈せざるを得ない」といった慎重解釈派、消極解釈派も少なくなく、学生の反応や取り組み姿勢を冷静に見つめながら、満足度をさらに高める授業を展開していかなければならない。

一方、授業を参観した行政、地元関係者らの感想・反応をアンケート結果から見ると、「今回の授業に対する感想は」との問いでは76%強が「とても良い」と答え、その理由として▼学生の授業態度▼授業の内容・雰囲気との2項目で96%を超した。また、担当教員の授業に対する熱意についても80%強が「とても熱心と感じた」と高く評価しており、学生側の一定程度の満足感、充足感と総合してみると、教員、受講生とも相応に熱心に授業に取り組み、受講生に対してはまずまずの満足度、習得度を与えていることが浮き彫りにされた。

⑨ 社会人力の向上（評価：3.16点 内訳：4点/2名、3点/3名、2点/1名）

【総括評価】

コミュニケーション力、課題解決力、そしてリーダーシップからなる「社会人力」を育成するのが本事業の趣意。知識や経験が乏しく、判断力も十分に備わっていないとされる若者にとって極めて難しいテーマで、「(向上したという)域には達していない。まだ習得途上というところ」といった見方も示された。実際、学生アンケートによる自己評価を見ても、授業前と授業後と比較した場合、5段階評価で0.5ポイント程度伸びているものの、これを以て成果があがったということは難しい、との見解も。しかし、「現状から課題を設定(発見)することができますか」といった課題解決力に関する問いでは、授業前と授業後で0.7ポイント近い大幅な伸びを記録している。社会人力という言葉自体、初めて聞き、初めて学ぶ学生が大半だが、こうしたアンケート結果を見る限り、本事業への取り組み方次第では、学生の能力をまだまだ伸ばしていくことができることを示唆している。

【個別評価】

学生アンケートによる自己評価では、総合で授業前の自己評価が3.39だったが、授業後は3.89に伸び、一定の進歩がうかがえた。内訳別では課題解決力が授業前から0.65ポイントアップして3.94になったのをはじめ、リーダーシップが0.5ポイント伸びて3.91に、コミュニケーション力が0.46ポイント高くなって3.93に。

個別の項目別では、授業前と授業後で改善の伸びが最高になったのが、上記の総括評価の中で紹介した課題設定関係で、0.69ポイントアップした。これに続いて「相手に自分の意見を、要点を整理して伝えることができますか」(コミュニケーション力)の0.66ポイント、そして「他者を通して自分との違いを発見することができますか」(リーダーシップ)と「設定された課題を解決する提案ができますか」(課題解決力)の0.63ポイントアップが上位に並んだ。

それに対し、「相手の挨拶に応じて、また自発的に挨拶が行われていますか」(コミュニケーション力)が自己評価として最も高いものの、伸び率自体は0.28ポイントアップにとどまって最も低い伸びに。「客観的に現状を分析することができますか」(課題解決力)と「自分自身が信頼を得るように努めていますか」(リーダーシップ)の0.34ポイントアップが伸び率ではワースト3になった。

全体として一定の進歩がうかがえたとはいえ、「平均で0.5ポイント弱の伸びという結果をどう評価するかは難しい」として「分野ごとの集計、分析をすることで、さらに達成度が明確になるのではないかとさらなる詳細分析の必要性を訴える意見も。他方で、これまで外部に出て研究をしたり、面識のない人と意見や情報を交換した経験の少ない学生が、今回の講座で初めて過疎の村に入って地元住民と積極的に交流するなど、得難い経験をして成果を挙げた、との報告もあり、現段階での評価はまだ低いものの、一定の経験を積めば、相応の力をつけることが可能であることを示している。

経済界は若者に何を求めているか。日本経団連が行った「産業界に求められる人材と大学への期待に関するアンケート」によると、グローバル時代を反映して優れた語学力を求めるところも少なくないが、何よりも既成概念にとらわれずにチャレンジ精神を持ち続けることが最重要、との回答が目立っている。こうした産業界の声に応えることのできる教育と人材育成対策の充実が必要なわけで、「産業界の期待感も重く受け止め、本事業でも期待に応えられるようなカリキュラムの設定が望まれる」という要望が連携取組評価部会委員から示された。

それと併せて企業側は採用する際、「一般教養試験の成績より、論文の内容や面接時の態度を重視している」ことを紹介。「自分の考えを持ち、組み立てられ、理解しやすく説明できる能力を求めている」として、コミュニケーション能力、課題解決能力の習得には特に力を入れ、企業側のニーズにしっかりと応えていくことの重要性を強調する意見も連携取組評価部会委員から寄せられた。

## 2. 学生の山形県内への就労意識について

(評価：3.00点 内訳：4点/2名、3点/1名、2点/2名)

### 【総括評価】

「山形県を総合的及び多面的に理解し、山形県で活躍し、山形県の地域社会を変革し、山形県の将来を担う人材を育成する」のが本事業における連携取組の達成目標。具体的にいえば、本事業を通して、社会人を備えた優れた人材を育てて地域社会に輩出。地域の発展に役立てようということに尽きる。しかし、地域に貢献できる人材の育成は大学等における限られた期間の教育だけでできるはずもなく、本事業の展開のみで本県志向が強まることはあまり期待できない。学生アンケートで「本県で働きたい、チャンスがあれば本県で働きたい」と答えた36%の受講生の声を大事にし、次代を担う戦力として地元の産業界で吸収できるような環境を整えつつ、「現時点で何ともいえない」との31%の学生の意識と目を本県に向けさせるような仕掛けを考えるなど、連携校と地域の経済界が知恵を出し合いながら、さらに工夫を重ねることが強く望まれる。

### 【個別評価】

本事業で展開されている講座は地域の発展に寄与できる社会人として不可欠な力量を育むよう設定されており、地域への関心度を高める工夫も施されている。「授業の中身はすべて、地域との関わりのあるものばかり。地域に対する学生の興味を高める効果はある」「当然のことだが、受講前に比して、山形県への興味や知識は大きくなった」といった評価は、本事業が一定程度、成果を挙げていることを示している。

ただ、そうした興味、知識が卒業後も本県に残って働くという地元志向に直結しているとは言い難い。連携取組評価部会委員からは「山形県に関する知識を就職や進学先選択の際に真剣に考慮に入れるかどうか。そこまでの学生はまだ、いないようだ」と冷めた見方が示されるとともに、「県内就労に関するアンケートでは、4割以上が意思表示をしていないことなどから、何とも評価できない」としながら「1科目の受講だけで県内就労意識を醸成させることは難しいのではないかと成果だけを性急に求めることを戒めている。

今後の進め方として「県内就労意識を醸成させるためには、各分野の授業内容を連動させ、それぞれの分野の授業を組み合わせたモデルケースを示し、推奨する」などの案が示された。同時に「山形県に対する理解をさらに深め、本県の優れた歴史や伝統、県民性などについても学生から積極評価してもらえる仕組みを考えたい」「学生の職業観や就労意識を醸成するキャリア関係教育を、行政、民間、教育界が足並みをそろえて構築して学生側に提供する」など、さらなる充実策を訴える意見が寄せられた。

この問題に関連して、地元金融機関の首脳は本講座関係の講演の中で、「学生は就職先を選ぶことに血眼になるのではなく、自分の人生の針路はいかにあるべきか、しっかり考えたい」と厳しく諭した。大学であれ、短大であれ、どの会社に就職するか、ではなく、どんな仕事、どんな職業に就いて、己の人生を刻むのかを考えるのが先決、というメッセージだ。もって銘ずべきだろう。

最近、東京や大阪の下町にある町工場や下請け企業の優れた技術力が高く評価されてきている。生きざまを実感し、持てる能力や知識を最大限に発揮できるチャンスは、大手・一流企業や有名企業よりも実はこうした中小、零細企業にこそあることを学生に伝え、この先、“発展途上過程”にある山形県で生きていくことを考えてもらおう試みもまた、必要だろう。



### 3. 大学等と山形県をはじめとする行政・政財界との連携について

(評価：2.83 内訳：5点/1名、3点/3名、2点/1名、1点/1名)

#### 【総括評価】

本事業では山形県当局をはじめ、各経済団体の代表らが連携機関委員（ステークホルダー委員）として参画。さらに講座の開設・運営に当たっては関係自治体や団体が積極的に協力するなど、まさに官と民が一体となって、優れた学生の育成と講座の充実に向けて力を出し合った。その意味では大都市圏では考えられない、住民らの協力体制の上に積み上げられた、地方ならではの事業といっても過言ではない。ただ、こうした関係者の努力も、どこまで県民に認識され、共感を得ているか、となると、疑問を持たざるを得ない。今後、県民に積極的にアプローチし、その意義を理解してもらう地道な努力が強く求められる。

#### 【個別評価】

「各大学等の教員が連携した講座の運営により、県内高等教育機関全体の教育内容の向上に結び付くことや、産業界等と連携した事業評価を行う仕組みを構築するなどの面で、今後、大いに期待できる」と今後への期待を込めて高く評価するのは県関係者。総合大学と単科大学、四年制大学と短期大学、内陸と庄内、置賜といった、あらゆる壁と違いを乗り越えて組み立てた事業で、しかも民間の力を導入しながら手作りで進めてきた事業だけに、教育関係者のみならず、若者の県内定着の観点から行政関係者らの思い入れには並々ならぬものがある。

しかし、その一方で極めて冷めた見方があるのも事実。「(大学等と行政・政財界との連携が進んでいるか、どうかについて) 現段階では評価不能というところ。市町村等と一緒に講座を進めている科目があることは分かるが、“連携”がなっているとまでは言えまい。すべて今後の努力次第」と手厳しい意見や、本事業の最大の狙いとされる社会人力の育成との関連で、「講座の履修と社会人力育成がリンクするかの検証」を強く求める声が出たのも、そのあらわれだ。担当教員の中からも「大学全体が、いかなる領域であれ、もっと積極的に地域社会との連携を志向すべき」といった大学教育の在り方そのものに言及する意見も寄せられた。

そうした中で当面、具体的にどこに力を入れていくか。連携取組評価部会委員の間で目立つのは、事業全般の充実もさることながら、広報活動を大幅に強化し、県民の理解を得なければならない、という点だ。「この取り組みは県内企業にあまり知られていない。商工団体等を通じた広報、求人申し込み企業への広報など、積極的な広報活動が必要」としたうえで、われわれも参加団体として協力するので、広報資料の作成や広報の機会を設けてほしい—という具体的な要望も出された。さらに、「行政や実業界などに理解を求める努力がもっと必要だ」としたうえで「事業の意義や特性、メリットなどを積極的に社会にアピールしなければ、県民、とりわけ企業などに理解を求めることは困難だろう」と指摘。特にメディアへの情報・資料提供などを積極的に行い、地域の理解と共感を得、併せて企業側にも評価してもらえるような対策の推進が必要、と訴える意見も出された。

こうした広報活動は連携校側が中心となって進められるが、連携校や事務局の自助努力を促すだけでなく、民間ならではの柔軟な発想を持つ連携機関委員側の主体的な取り組みも不可欠だ、と連携取組評価部会委員は力説。「(連携に向けた努力は) 大学側だけでなく、行政やわれわれステークホルダーも心すべきところ」と関係者が一体となった、さらなる協力の重要性を強調している。

平成27年3月6日

山形人材育成委員会  
連携取組評価部会